2022 10 OCT No.409

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

地域会だより ―― 1

連載【隔月 全6回】大阪建築家ものがたり
第3回 – 大阪市中央公会堂 – ―― 2
倉方 俊輔

新連載：コンペ・プロポーザルのありかた ①
新しい設計者選定に向けて
蒲郡市塩津地区・西浦地区学校複合施設
実施設計業務プロポーザル結果速報 ―― 4
恒川 和久

三重発 ～2022 Study Session1～ 謡口 志保 氏 講演会
私のまちへの関わり方ー記録する、活用する、共感する ―― 6
奥野 美樹

会員のステージ
風に乗って ―― 7
塚本 隆典

保存情報 第249回
登録有形文化財：葛利毛織工業株式会社 ―― 8
谷 進

編集後記 ―― 8
石田 博英・服部 昌也

TOPIC
国際芸術祭 あいち2022 STILL ALIVE ―― 9
宮坂 英司

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部
・10/ 8・9 第9回 JIA東海住宅建築賞2022 第二次・最終審査
・10/14 第4回 支部役員会（WEB同時開催）
・10/30 第38回ＪＩＡ東海支部設計競技 一次審査

■JIA静岡地域会
・未定

■JIA愛知地域会
・10/1・2 「ウッドコレクション2022 inあいち」@モリコロパーク 一寸格子WS
・10/28 第5回役員会（WEB同時開催） CPD研修会

■JIA岐阜地域会
・未定

■JIA三重地域会
・10/7 第５回役員会 第４回例会
会員研修：まちを見つめる建築家 第2回
講師：山上 健 氏・対面+ZOOM 他地域会の方も参加可
（第1回の内容は本号6ページをご覧ください）

Bulletin Board

イベント

JIA建築家大会2022沖縄
首里城の輪郭 失われたことで みえてくるのも

■ 会 期 2022年10月20日（木）・21日（金）・22日（土）
■ 会 場 那覇文化芸術劇場なはーと 大劇場・小劇場
■ 主 催 公益社団法人 日本建築家協会

■お問い合わせ／公益社団法人 日本建築家協会 沖縄支部
TEL：098-943-8949 www. jia-okinawa.org

速報

第9回 JIA東海住宅建築賞2022 第一次審査結果

第9回JIA東海住宅建築賞の第一次審査が、9月10日公開で行われ、以下のとおり最終審査対象作品が選定されました。（設計者50音順）

「川と家」井端菜美／goboc設計事務所
「house/shop F」木村吉成+松本尚子／木村松本建築設計事務所
「Pergola」葛島隆之／葛島隆之建築設計事務所
「土蔵と補う増築」澤秀俊／澤秀俊設計環境 SAEADEE
「鳴海の家」畠山博敏／一級建築士事務所 neie
「不惑の一棟」望月成高／望月工務店・望月建築設計室

表紙 街で見かけた風景 ⑦ ―― 「よるのさんぽ」

イタリアでは「パッセジャータ」という散歩の習慣があるそうだ。週末の夕食の後におしゃれをして、まちの目抜き通りを何度も行ったり来たりしながら住民同士で会話を楽しむ。まちに人々が潤いの風景をつくり、人々は今ここに生きている実感を持つ。また、ある研究者は「人類は歩くことから音楽を創り出した。音量はその人物との距離、拍子は足音、メロディーの起伏は動作音に生じるドップラー効果」であると。

「〈脳と文明〉の暗号：言語と音楽、驚異の起源」マーク・チャンギージー 2020年 ハヤカワ文庫NF

吉元 学（JIA愛知）
ワーク○キューブ／愛知淑徳大学

大阪建築家ものがたり 全6回連載

第3回 大阪市中央公会堂

名古屋市役所本庁舎から

名古屋市中区三の丸には「名古屋市役所本庁舎」（1933年）と「愛知県庁本庁舎」（1938年）が建っている。2014年に共に国の重要文化財に指定された。自治体のシンボルとして建設された現役の昭和戦前期の建物が並び立つ光景は、全国的にも貴重である。

どちらも和風を意識したデザインだ。第二次世界大戦後、こうした建物は「帝冠様式」と呼ばれるようになる。明治以降に輸入された西洋的な庁舎のつくりの上に瓦屋根を載せているのは、アジアに進出し、ますます自信を強めていった大日本帝国の冠のようだ。装飾を排除したモダニズムの潮流に反し、軍国主義に向かう時代に迎合した建築である。そんなニュアンスで、以前は「帝冠様式」という言葉が使われていた。

今は文化財として評価されるようになった背景には、戦前期の建物の現存数が少なくなったこともさることながら、モダニズムへと向かう進歩史観から多様な評価軸への価値観の変化がある。

二つの庁舎は実際、地域性に根ざしている。1945年の空襲で焼失したが、近隣には1612年に完成した名古屋城天守閣があった。御三家筆頭・尾張徳川家の居城として長く栄え、1930年には城郭として最初の国宝に指定された地域の誇りである。その存在を近代的に受け継ぎ、市民・県民を代表するものでありたいという考えがデザインの背後にある。

1929年10月に募集が開始された名古屋市役所本庁舎のコンペ（建築設計競技）は、審査員に建築家の佐藤功一、構造学者の佐野利器、名古屋高等工業学校教授で歴史家の土屋純一、本連載の前回で触れた武田五一と鈴木禎次、それに名古屋市助役の6名が名を連ねていた。

募集の際の「設計心得」には「建築様式は任意とす」と書かれていた。様式を日本趣味に限定してはおらず、事実、1930年1月に決定された入選案の中にはゴシック調のものも、すっきりとしたモダンデザインに近い案も見られる。ただし、応募総数559もの激戦を制したのは、現在の愛知県豊山町出身の平林金吾のデザインだった。

二重の屋根を塔の上に載せた特徴的な意匠は実施設計でも踏襲され、これが後の愛知県庁本庁舎にも影響を与えた。平林金吾の案が当選したことの影響は大きい。

大阪のコンペの系譜へ

では、名古屋市役所本庁舎と大阪は、どのように関係しているのだろうか。設計者である平林金吾は、これ以前にも公共建築のコンペに当選している。1922年に実施された大阪府庁舎・府会議事堂のコンペだ。岡本馨との連名で応募した案が1等になり、そのデザインに基づいて、今も現役の「大阪府庁本館」（1926年）がつくられた。和風の外観ではないが、正面を引き締める4本の付け柱の意匠などは名古屋市役所本庁舎に似ている。

さらに名古屋市役所本庁舎と関連するのは、市民のシンボルを公募によって決めようという考え方である。日本で初の本格的なコンペは、現在、大阪市中央区の淀屋橋に建っている大阪市庁舎の先代の建物に際して行われた。1912年3月に募集が開始され、同年8月の締め切りまでに寄せられた65案の中から翌月、台湾総督府の技手だった小川陽吉が1等となった。これを基本に片岡安をはじめとする大阪市庁臨時建築課が設計した庁舎が1921年に竣工したのだ。

なぜ大阪市でコンペが開催され、これが後の大阪府庁本館、名古屋市役所本庁舎などにつながっていったのか。鍵を握るのが、1910年8月に第四代大阪市長に就任した植村俊平である。1888年の市制の公布によって、大阪市も名古屋市と同じく発足した。ただし、府からの独立は1898年の市制特例の廃止を待たねばならず、府と異なる独自の一体感にも市民との連帯感にも乏しかった。そんな状況下で就任した市長は、自治体としてのまとまりに貢献する市庁舎の建設を促進し、それを後戻りさせない手段としてコンペを用いたのである。

コンペは、公募時から建設プロジェクトの存在が告知され、完成した姿が誰の目にも先取りされるという性格を持つ。専門家を越えて市庁舎の建設を市民に訴えかけ、プロジェクトに時流に左右されづらい強靭さを与えるのだ。

コンペに当選した大阪市庁舎のデザインは、中央に高い塔を持つものだった。西洋における中世の市庁舎のように、自治的の精神を視覚化するのに適切なものとみなされたのだろう。同じスタイルが名古屋市役所本庁舎にも見られる。

岡田信一郎の抜擢

同じ時、もう一つのコンペが近くの敷地で行われていた。「大阪市中央公会堂」（1918年）のコンペだ。開館した当時、これほど立派な公会堂は東京にも、国内の他都市にもなかった。大阪にそれ

▲大阪市中央公会堂

ができたのは、一人の市民が巨額の寄付を行ったからである。

その人、岩本栄之助は1877年に大阪の船場に生まれ、29歳で両替商の家督を継ぐと、すぐに株式仲買商として才覚を発揮した。1909年には民間の実業家からなる渡米実業団の一員に加わる。団長は渋沢栄一だった。日本の資本主義の父とよばれ、2024年に発行が開始される新1万円札の表の図柄となる人物だ。岩本が32歳で31名の団員の一人になったことからも、若くして築いた立場と寄せられた信頼がうかがえる。

帰国後に注力する電気や鉄道の事業の大事さを、岩本はアメリカで理解した。そして、社会的で成功した人物が公共的な事業に財産を投じていることに感銘を受け、帰国後の1911年、公会堂の建設のために大阪市に100万円を寄付することを決めた。現在の価値にすると約50億円にもなる大金である。

大阪市は公会堂をどのように建設するかを建築界の第一人者である辰野金吾に相談し、辰野の提案によって、複数の建築家に設計案を出してもらい、優れたものを採用するコンペが実施された。辰野が指名した13人の中から互選方式で一等に選ばれたのは、後に国の重要文化財である明治生命館などを設計する岡田信一郎の案であり、辰野らの実施設計によって実現した。

辰野金吾による実現

大阪市中央公会堂は、正面から見た時、左右に塔を従えたアーチ型の屋根が印象的だ。川からの眺めを十分に意識したこうした外観はコンペ案に忠実で、若い日からの岡田信一郎の才能を物語っている。

同時に、実施設計で加えられた要素も良いのである。その一つが正面のアーチ型の屋根の下に位置する貴賓室。現在は特別室として貸し出されている部屋の装飾画において、辰野は友人であり、近代洋画の最初期を代表する画家・松岡壽を起用した。中央が高い天井の形を生かし、ドラマチックに日本神話の場面が描かれている。木内真太郎によるステンドグラスも技工を尽くしたもので、2羽の鳳凰の間には大阪市の市章である澪標（みおつくし）が隠れている。

公会堂の主要な部屋は、みな異なった装いだ。特別室と壁ひとつ隔てた3階の中集会室は、ヨーロッパの宮殿を思わせる優美さで、完成したときは大食堂だった。洋館がまだ珍しく、レストランも一般的でなかった当時、この部屋を訪れた人はどんなに目を見張ったことだろう。

さらに隣の小集会室は木の味わいを生かしたインテリアだ。こちらは当初、中食堂とよばれていた。現在は音響設備やグランドピアノを備え、くつろげる雰囲気もあって、適度な人数のコンサートやパーティなどに愛用されている。

最も大きな部屋は、1階と2階が吹き抜けた大集会室で、長方形の空間に1161席が用意されている。2階の客席はコの字型に配されていて、壮麗なインテリアもさることながら、観覧者も観覧されるような席の配置に、通常のホールと違った味わいがある。

コンペには市民と建築家を巻き込むドラマがあることを、山本想太郎との共著『みんなの建築コンペ論』（NTT出版、2020年）で綴った。一つの建築が、幼稚園も高校生も読み解ける社会的な教材になることを『はじめての建築01 大阪市中央公会堂』（生きた建築ミュージアム大阪実行委員会、2021年）の執筆では実証し、2021年のグッドデザイン賞 グッドデザイン・ベスト100を受けた。いつか名古屋市役所本庁舎と愛知県庁本庁舎についても、同様にまとめたいと思う。

倉方 俊輔
大阪公立大学教授
建築史家

国語

公会堂の中の
「大集会室」「中集会室」「小集会室」「特別室」は、
大きさだけでなく、雰囲気も違っていて、
それぞれに適した使い方がありそうです。
それぞれの部屋を使いたくなるように、
特徴を伝えるキャッチコピーをつけてください。

ポイント キャッチコピーとは、宣伝や広告などに用いられ、読み手に興味をもたせて、心を引きつけるように工夫された印象の強い短い言葉です。自分が感じたり、考えたりしたことは、どうしたら他人に伝わるでしょうか。説明をこえた言葉で、建築を魅力的に表現してほしいと思います。

大集会室

中集会室

小集会室

特別室

26　小学校5～6年　　27

▲2021年のグッドデザイン賞 グッドデザイン・ベスト100を受けた『はじめての建築01 大阪市中央公会堂』（生きた建築ミュージアム大阪実行委員会2021年）より一部抜粋

新しい設計者選定に向けて　蒲郡市塩津地区・西浦地区

公共建築の設計者選定に関する連載

本誌でもたびたび取り上げているように、JIAでは公共建築の設計者選定のあり方について問題提起や提案を行っています。東海支部においても、愛知地域会に行政ワーキンググループを設け、自治体等に対してコンペやプロポーザル制度に対する要望を出したり、JIA愛知が自治体から委託を受けてコンペ実施の支援を進めたりしています。

筆者自身、この地域で公共建築の企画づくりやプロポーザルの審査に関わることも多くあり、より良い設計者選定の方法を模索しています。また、この春より本誌の編集長を務めることになり、設計者選定のあり方を考え、発注者、提案者、当選者、審査員等の生の声をお届けすることで、コンペやプロポーザルの魅力や課題を共有する記事を、不定期で連載することにしました。8月号では、その第1弾として、行政WGの活動やスイスでのコンペ事情についての記事を掲載しました。今回は、筆者が審査委員長を務めた愛知県蒲郡市の2つの複合小学校の設計者選定プロポーザル実施の経緯と結果について紹介します。

蒲郡市での公共施設再編と設計者選定

蒲郡市は愛知県南部の三河湾に面する人口約8万人の街です。全国の多くの自治体と同様に、経済成長期につくられた公共施設の老朽化が進み、財政状況も厳しくなる中で、既存ストックをどのように維持あるいは再編するのかが大きな課題となっています。市では数年前から、公共施設の今後について市民を交えた議論を重ねてきました。特に小中学校等の地域施設については、8つの中学校区すべてで、公民館や保育園等との統廃合や複合化を含む地域施設再編のあり方について議論する市民ワークショップを重ね、2021年8月には、今回のプロポーザルの対象となる塩津地区と西浦地区で、「地区個別計画に基づく基本計画書」を策定し、学校や公民館等の機能を複合化する施設整備の方針が示されました。

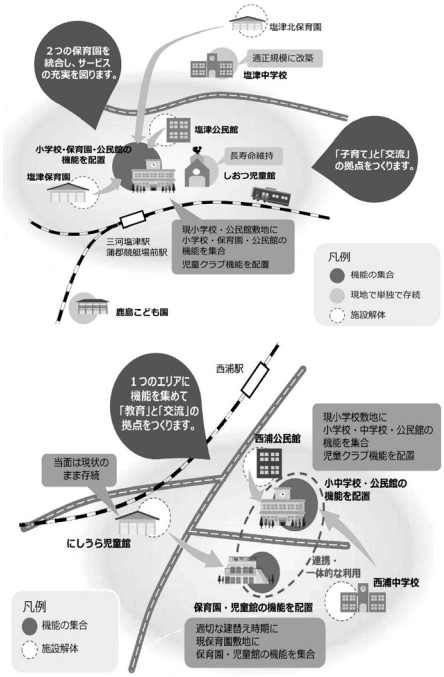
基本計画書の策定にあたっては、某組織設計事務所が取りまとめの支援をしており、そのまま実施設計業務を担うものと思われてきました。一方、同時期に進めていた「公共施設マネジメント実施計画見直し検討会議」にて、これから続く学校施設整備の端緒ともなることから、優れた提案を求める設計者選定を行うべきとの声を挙げたところ、担当部署の理解や市長からの後押しも得て、プロポーザルが実施されることとなりました。

塩津地区・西浦地区プロポーザルの特徴

今回の塩津地区・西浦地区学校複合施設実施設計業務プロポーザルは、これまで蒲郡市等が行ってきた設計者選定方法とは異なる以下の3つの特徴があります。

①幅広い設計者が参加できるよう、実績より提案内容を高く評価。同種・類似施設の設計実績の有無を参加資格から外すとともに、事務所の規模や担当者の経験年数による評価をなくし、参加者の門戸を広げました。一次選考では、書式自由の設計実績や取組み姿勢を評価（30%）するが、設計コンセプトの考え方をより重視（70%）して二次提案者5者を選定。二次選考では提案のみでの評価としました。

②2つの地区の学校複合地域施設のプロポーザルを同時に実施。幅広く市民の関心を高めるため、2つの施設の審査を同時に実施。二次選考のヒアリングは社名も公表の上、公開で実施し、後日動画の配信も行いました。設計対象は、塩津では小学校＋公民館＋保育園、西浦は小中一貫校＋公民館＋児童クラブと、いずれもこれまでにない複合施設であり、新しい教育のあり方から地域との交流まで、幅広い内容の提案が求められました。



◎塩津地区・西浦地区の公共施設再編「基本計画書」より抜粋

③基本計画を尊重した実施設計に向けた技術提案。両地区とも、2019年から3年以上にわたる市民ワークショップをふまえて、複合施設に再編する機能を選定し、様々な条件を考慮した個別施設計画、さらに設計事務所を交え基本計画を策定してきました。実施設計にあたっては、これらの成果を尊重した技術提案が求められました。優れた設計案を求めることはもちろん重要ですが、これまで地域の方々が議論を交わして積み上げてきた成果は尊重すべきであり、住民の期待を繋いでいける柔軟な提案を求めることとしました。

選考の経緯と結果

選考の経緯や講評については、HPで公表されている審査結果報告書や選定委員会の議事要旨、公開ヒアリングの動画で詳しく報告されていますが、ここでは審査の状況について簡単に触れます。

一次選考では、社名が記載された設計

学校複合施設実施設計業務プロポーザル結果速報

実績や業務の執行体制の提出書類と、設計コンセプトの考え方（匿名）の書類について、それぞれが紐付かないように評価を行い、上位5者を二次選考の対象者に決定しました。結果的に両地区とも組織設計事務所がほとんど残らず、建築家によるアトリエ・設計事務所が二次選考に進むことになりました。

公開ヒアリング後に行った、二次選考での議論では、基本計画の考え方をどの程度尊重しているか、また、基本計画を逸脱する部分をもつ優れた提案をどう評価すべきかが大きな論点となりました。その結果、両地区とも、全国に多くの実績を持つ著名建築家による、基本計画に沿いながらその課題や欠点を補いより魅力を持たせた提案と、東海地域を拠点とする建築家による、基本計画の配置等を見直し新しいあり方を示す提案が、最優秀案を争うことになりました。

この他にも、学校建築の実績への信頼があり基本計画を踏まえた堅実な提案や、ヒアリング時のプレゼンテーションに惹かれた説得力ある提案を推す声もありました。しかし、慎重な議論の結果、最終的に、塩津地区では新居千秋都市建築設計、西浦地区では有限会社ナスカ（代表・古谷誠章）が、優先交渉権者に選定されました。

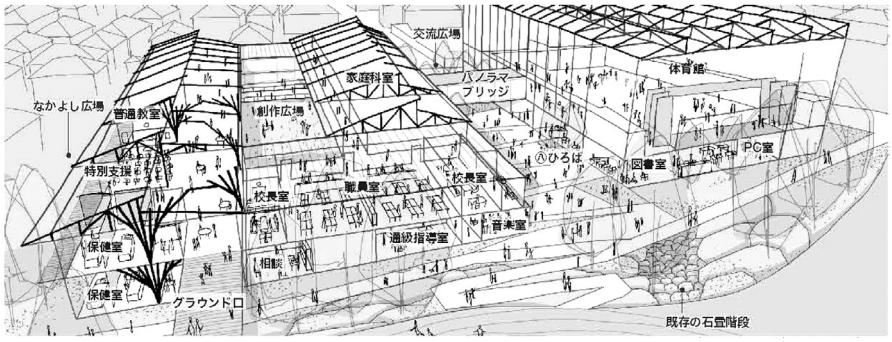
塩津地区 二次選考 提案事業者（五十音順）

- **株式会社新居千秋都市建築設計**（優先交渉権者）
- **株式会社大藪元宏建築研究所**
- **株式会社環境デザイン研究所**
- **株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ**
- **有限会社大建ｍｅｔ**（次点交渉権者）

西浦地区 二次選考 提案事業者（五十音順）

- **株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ**
- **株式会社大建設計 名古屋事務所**
- **有限会社ナスカ**（優先交渉権者）
- **株式会社濱田慎太建築事務所**
- **FULL POWER STUDIO株式会社**（次点交渉権者）

◎塩津地区・新居千秋都市建築設計の提案書より一部抜粋



◎西浦地区・有限会社ナスカの提案書より一部抜粋

最優秀案の審査講評
（審査結果報告書より一部抜粋）

塩津地区・新居千秋都市建築設計の提案は、基本計画に沿いながらも、各施設の機能連携強化やコストを圧縮する提案が高く評価されました。特に、敷地内の東西に2本の大きな「緑の並木道」を設けることで各施設へのアクセス性を良くする提案や、校舎北側のグラウンドと昇降口のレベルをあわせるとともに校舎に段々状のテラスを設けるグラウンドへの採光確保と圧迫感軽減を図った点などが優れた提案として受け止められました。

西浦地区・ナスカの提案は、幅広く西浦地域を見据えてこの施設のあるべき姿を追求する姿勢、森や自然を多世代の教室とする「森が学校計画」、建設コストに配慮しながら校舎の多くを木造化するなど、基本計画を尊重しながら発展的により良くする提案内容が評価されました。特に、西門からグラウンドを結ぶ「海と森をつなぐ軸」に沿った広場側に公民館の入口と学校の昇降口を設け、交流に資するスペースが広場に面して配置され、地域と学校が融合する提案となっている点や、敷地全体にわたって既存の自然や地域資源を活用した広場や森を展開し、あるものすべてを学びの場として活かしていこうとする提案内容に共感しました。

これからへの期待

特定された提案は選定委員会一同が自信を持って選んだものですが、個人的には地元や若手の建築家を選定できなかったことが残念でもあります。地域の設計者を育てることもプロポーザルの役割のひとつであり、こうした機会を増やしていくことも大事だと思います。

一方、特定された二者はいずれも、施設の運営者・使用者・地域の方々との協働について極めて前向きな提案であったことも印象的でした。地域と協働する設計プロセスの中で、さらにコミュニティの力が強まり、学校と地域施設が融合した、子供にも地域にも愛される建築ができることを心から願っています。

恒川 和久（JIA愛知）
名古屋大学大学院工学研究科・教授

「私のまちへの関わり方ー記録する、活用する、共感する」

●講演者：謡口 志保 氏
●参加者数：会場10名＋オンライン18名

今年度の研修委員会事業は、1年を通した４回の連続企画です。講師には、前もって共通テーマを挙げて、それに応える形でご講演頂きます。共通テーマは、「まちを見つめる建築家」。主旨は、「建築という社会と密接に関わり合うこの分野には、独自の視座を持つ建築家がいる。東海地方で活躍している建築家の"生きた"お話を聴く企画」です。

第１回目の今回は、謡口志保氏にご登壇頂きました。氏がまちと関わる手法として、「設計する」「記録する」「活用する」「共感する」の４つに整理されており、そこから特徴的な３つについてお話しされました。

○記録する一編集者・研究者として

『渋ビル手帖』は、すでに累計2万冊弱を発行した自費出版本です。小冊子ながら充実度が高い渾身の記録集で、掲載されているものは渋ビルと名付けられた、極く普通のビルです。有名建築家によるものだけではなく、見過ごされてしまいそうな古い建物が対象で、褒めて愛でて撮影する街歩き集団を名古屋渋ビル研究会と称しました。路上観察学会さながらで、今では取り壊しの危機に面しているかもしれない近代建築を、溢れる数の写真とユーモラスなイラスト、洒落た記事やキャプションによる紹介は、思わず微笑んでしまいます。

謡口 志保 氏

○活用する一運営者として

近代建築への愛情は、見るだけでなく活用にもつながっていました。

１例目は、一宮市に80年を超えて鎮座してきた旧尾西繊維協会ビルの文書庫の活用事例です。一宮市は以前に繊維で発展した尾州産地の中心です。ここに、インスタレーションや展示を行う創造空間としての利用を企画されました。渋ビルをデザインの発信拠点として、新しい人・会社・創造を呼び込み、古き良き時代から新しい時代へ導く意欲的な運営を提案されています。

２例目は、東京の千駄木にある古民家をリノベーションした事例です。戦火を潜り抜けたこの界隈は下町情緒が残る。築100年の一軒家を使って昔の記憶を呼び戻し、人と街と物を繋ぐ「小さな窓口」になることを意図されています。地域に向けて"窓"を開ける方法は、実測の後の改修工事から始まり、主な仕上工事は仲間とセルフで行われました。完成後は、事務所＋住まい＋レンタルサロンとしてオープンし、着付けや絵画、お花の教室など暮らしとの繋りを自らの手で試みられています。

○共感する一企画者として

記録するには事前に調査が必要となり、活用を維持していくにはそれなりの動員も大切になるでしょう。一宮せんい団地では、国の店舗等集団化事業により1971年に完成され、今も膨大な図面・資料が残ります。それを基に渋ビル手帖を作成。その手帖に触発されて、団地の活性化委員会からお声がかかり、渋ビル散歩（見学会）の企画がなされ、人目を引くマルシェやキッチンカーなどの効果と相まって、2,000人の集客に成功しました。また、氏の出身地である鳥取市での取組では、一部しか利用されていないプラザ佐治という豪雪山村開発センターを、手帳から始めてシンポジウム

渋ビル手帖とmapの宝典

を開催し、建物見学会を行ないます。ポテンシャルを市民と共有しながら、新しい活用方法を見出していくというまちおこしの起爆剤的役割を担っています。

氏の３つの手法は、あまり目を向けられなかった渋ビルに視点を当てただけでなく、その建築が出来上がった理由や設計意図を汲み上げて皆と共有するところに、卓越した視座をもつと思われます。この過程は窺い知れないですが、とてもハードであろうと推察されます。氏が語るようにまちの主役は、「建築」と「そこを守る人」であり、その理念を忠実に実践しながら、一つずつ丁寧に手間をかけて建物の魅力を引き出していく姿勢は、今や多くの建築家が忘れつつある大切な立脚点です。

最後に、まちづくりに携わってきた先輩建築家から、この活動が一過性でなく後継していくような仕組み作りを期待され、氏の今後の活動にエールを送られました。

奥野 美樹（JIA三重）
奥野建築事務所

風に乗って

まだ小学校に入る前のことです。親戚の方に某航空機メーカーの工場に連れて行ってもらい実物大だったと思いますが、ジェット戦闘機の木製模型に製作中にもかかわらず乗せてもらったことがあります。今ではとても考えられないことですが。格納庫の中央に置かれた機体を今でも鮮明に覚えています。それ以来いつかは空を飛んでみたい、飛行機を操縦してみたいと思っていました。

3年ほど前になりますが、ある人の紹介で飛行クラブに入会することができました。

入会前に教官の操縦する機に同乗してフライトを体験するのですが、その日の気候条件が良かったのか一気に3,700フィート程度まで上昇することができました。遠く半島を望むことができる高さです。着陸後、無事入会が認められました。

いよいよ翌週から週1回の訓練が始まります。分解された機体（本体とフィン（垂直安定板）は一体となっていて、左右主翼とスタビライザー（水平安定板）、キャノピー（風防）が外されています）を格納庫から引っ張り出しては早朝より組み立てます。ランウェイ脇に数機を並べフライトの準備をします。

期待と緊張の発航です。1kmくらい離れたところでウィンチが索（ワイヤー）を一気に巻き上げ機体を引っ張り上げます。ランウェイをわずかに滑走し強いGを感じながら急角度で上昇し1,300フィートくらい上空に達したところでレリーズを3回引きフックから索を離脱し訓練が始まります。確実に離脱するために3回引きます。

いきなり目標物に対しまっすぐ飛行するよう指示されますが、機は左右上下に振られ操縦桿で制御しようと思ってもとても無理です。そのうち失速速度まで減速します。推進力を持たないグライダーが速度を上げるためには一旦機首を下げ下降させます（推進力を持つ航空機でも同じで、エンジンをふかし加速するのではないそうです）。

ここで初歩の操縦方法ですが、例えば左方向へ飛行するためには操縦桿を左へ倒すと同時に左側のラダーペダルを踏みこみます。機体を傾かせ（バンク）ながら旋回します。操縦桿を左右に倒すと主翼のエルロン（補助翼）が動き機体は左右に傾き（ローリング）、前後に倒すとエレベーター（スタビライザーについた昇降舵）が動き下を向いたり上を向いたり（ピッチング）します。ラダーペダルを踏むとフィンのラダー（方向舵）が動き左右に振れ（ヨーイング）ます。機はサーマルの上昇気流を捉え螺旋を描きながら上昇していきます。高度は登山で使う高度計と同じ原理で発航前に計器を0に合わせておきます。速度はピトー管で間接的に測ります（原理はよくわかりません）。

純白の優美な翼を広げ自分の機の下をあるいは上を青い空の中優雅に飛行している姿に感動します。あまりの美しさにもうやめられません。

着陸態勢に入るとピストカー（指揮車）へ高度と速度を連絡します。操縦桿の先端にボタンがついていてそれを押すとマイクがONになります。「このボタンを押すと機関銃が撃てるのですか」と教官に聞いたところ、「実弾は装填してないので撃てませんよ」の一言で見事に撃墜させられました。

着陸態勢に入ると主翼に付いたエアブレーキを上げ減速しながら教官の超高度なテクニックで着陸します。完全に機が停止して初めてどちらかの主翼が地面につきます。訓練はこれで終了です。着陸するときの速度は90km/hくらいで、ランウェイに突っ込んでいくという感覚です。

コロナや仕事の関係でほとんど訓練に参加することができなくなりやむを得ず退会することとなりましたが、よき先輩、教官のご指導を受け本当に充実した日々でした。

一回限りの体験飛行も可能ですので一度経験されてみてはいかがでしょう。

塚本 隆典（JIA愛知）
塚本建築設計事務所

保存情報 第249回

登録有形文化財 葛利毛織工業株式会社（くずりけおりこうぎょう）

正門及び社屋群

愛知県尾張西部から岐阜県西濃の羽島市付近一帯は尾州と呼ばれ、毛織物産業の盛んな地域として古くから知られている。中小規模の事業所が多く、2～3連の鋸の歯の形に似た「のこぎり屋根工場」がかつては集落の中にも多く点在し、北側採光の天窓を持つ黒い下見板張りの工場からはガッシャンガッシャンと織機の操業する音が聞こえていた。規模の大きな事業所では、たいてい淡い色彩に塗装された洋風下見板張りの事務所棟が建っていた。そんな繊維産業が華やかな昭和の時代を切り取るかのように、葛利毛織工業㈱の社屋群は今も佇んでいる。

葛利毛織工業㈱は創業慶応年間とし、開業の昭和7年に毛織物業に本格的に進出した。本場ヨーロッパでも珍しい「ションヘル織機」を今でも使い続け、風合い豊かな毛織物を手間と時間をかけて生産し、世界のトップブランドを相手にビジネスを展開している。時間をかけることで羊毛の中空繊維がストレスを回復し、風合いと伸縮性を獲得した布地が出来上がるという。

周辺一帯は他にも繊維産業由来の建物が残り、過去に保存情報掲載のために取材した建物2件もすぐ近所に存在する。尾州の歴史街づくりエリアとしてさらに注目されてもいい地域で、葛利毛織工業㈱流の温故知新に学ぶ街づくりが展開されることを望む。

のこぎり屋根工場

工場内北側採光窓

こちらから織機音をお聞き頂けます→
※一定期間過ぎると ご試聴できなくなる可能性があります

【概　要】
物件名：葛利毛織工業株式会社
所在地：一宮市木曽川町玉ノ井字宮前1
登録年月日：令和2年8月17日
登録番号：23-0549　葛利毛織工業株式会社工場
建築年代：昭和7年頃/昭和20年頃・昭和30年代増築
木造平屋建、瓦葺、建築面積563㎡
登録番号：23-0550　葛利毛織工業株式会社事務所
建築年代：昭和7年頃
木造2階建、瓦葺、建築面積55㎡
登録番号：23-0551　葛利毛織工業株式会社主屋
建築年代：昭和24年頃
木造2階建、瓦葺、建築面積186㎡
登録番号：23-0552　葛利毛織工業株式会社離れ
建築年代：昭和7年頃/昭和25年頃・昭和50年頃増築
木造2階建、瓦葺、建築面積97㎡
登録番号：23-0553　葛利毛織工業株式会社男子寮
建築年代：昭和27年頃/昭和32年頃増築
木造2階建、瓦葺、建築面積43㎡
登録番号：23-0554　葛利毛織工業株式会社旧浴場及び便所
建築年代：昭和30年頃/昭和30年代増築
木造平屋建、瓦葺、建築面積34㎡
登録番号：23-0555　葛利毛織工業株式会社土蔵
建築年代：江戸末期
土蔵造2階建、瓦葺、建築面積55㎡
登録番号：23-0556　葛利毛織工業株式会社原糸倉庫
建築年代：昭和23年頃
木造平屋建、瓦葺、建築面積56㎡
登録番号：23-0557　葛利毛織工業株式会社倉庫
建築年代：昭和32年頃
木造平屋建、瓦葺、建築面積52㎡

谷　進（JIA 愛知）
（有）タクト建築工房

編集後記

●編集後記を書いている今は9月上旬ですが、朝晩には熱気も薄らいで、やっと普通の夏らしくなってきました。普通と言っても、ここ数年は異常気象続きで、今年の夏も日本各地で猛暑日降雨量など記録更新が相次ぎました。ついには今年、日本気象協会が、最高気温40度以上の日を「酷暑日」夜間の最低気温が30度以上の夜を「超熱帯夜」と呼ぶことに決めたほどです。外出時には雨が降っていなくても雨雲レーダーを確認することが習慣になってしまいました。また日本だけでなく欧州でも記録的猛暑となり中国、アメリカなどでも猛暑、豪雨が発生しています。このような状況では今夏の猛暑や豪雨を単なる異常気象として片付けるのではなく、根本的な問題として考える必要があるかもしれません。気候が本当に変わってしまえば食糧難や水不足なども深刻な問題になるからです。（石田 博英）

●本号に掲載されている三重地域会の会員研修に参加しました。久しぶりの会員が集まる会でした。実際に人と対面すると、オンラインでは判りにくい講演者の人柄が感じられたり、他の人の反応が把握でき、理解が深まり発想の広がりがあるように思えます。今回の講演でも隣席聴衆の興味が尽きずWeb配信終了後におまけの講演をしていただいたりして、人と直接会うことの刺激の多さ、楽しさを実感するものでした。コロナ禍になってから、この編集会議もオンライン主体となり2年以上になります。今年からはメンバーが大幅に入れ替わりましたが未だ実際に全員が対面することがなく、少し遠慮がちに会議が進行しているように感じてます。コロナへの医療面での問題は今も残ったままで心配なところはありますが、対面での会議を取戻して新しい発展・楽しさを見つけていきたいと思う1ヵ月でした。（服部昌也）

ARCHITECT
第409号
発行日　2022.10.1（毎月1回発行）
定　価　380円（税込み）
発行責任者　大瀧正也
編集責任者　恒川和久
編　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内
ARCHITECT 編集部
岡崎市明大寺町荒井10番地
TEL（0564）21-2657　FAX 26-1792
発行所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http：//www.jia-tokai.org/

TOPIC トピック

国際芸術祭 あいち2022 STILL ALIVE

『STILL ALIVE』そのテーマを見て立ち止まってしまいました。

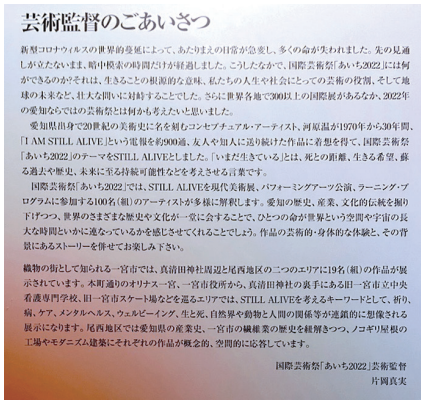
STILL ALIVE→まだ生きている。その言葉には深い意味があるように感じました。今回、こちらの執筆依頼を7月下旬に頂きました。おかげさまでいま、生業の方が非常に忙しくさせていただいており、8月に入り気がつくとお盆を過ぎ、月末になってしまいました。8月末締め切り。まだ何も見に行けてない。急遽無理やり時間を作り、まずは本丸、愛知芸術文化センターからと少し疲れた脳ミソの状態で、10階から見ることにしたその入り口に、『STILLALIVE』の意味が説明されていました。読んでいるうちに、脳天をドカンと叩かれたような感覚に襲われました。

STILL ALIVE→まだ生きている。事実、ここ数年の新型コロナの話は心を打ち砕かれるような内容ばかりです。

感染者数、重症化率、死者数。日々その数を見聞きさせられ、仲間の中でも罹患し重症化してしまったり。幸い私はまだ1度も罹患していませんが、日々、死が隣に存在するような重苦しい感覚で過ごして来ています。私はまだ**STILL ALIVE→まだ生きている。**

カレンダーを見直してみると、2020年の1月に開催されたJIA愛知の賛助会さんが企画した大阪見学会。その先はすべての行事が中止され続け、2020年のオリンピックは延期2021年に開催されたものの、目に見えない行動制限があり自由に過ごす事がなんとなく躊躇されて来ました。ここ数年の楽しい思い出がない。

今回、展示されている作品を見ていくと、人と人が遠ざけられ対面できないからこその言葉による芸術作品が非常に多いと感じました。なんとなく暗い影を感じるような。私が感じて来た孤独感や窮屈感は皆が一応に感じて来ていて、それが作品に反映されているような気がします。



芸術監督のごあいさつ

新型コロナウィルスの世界的蔓延によって、あたりまえの日常が急変し、多くの命が失われました。先の見通しが立たないまま、暗中模索の時間だけが経過しました。こうしたなかで、国際芸術祭「あいち2022」には何ができるのかそれは、生きることの根源的な意味、私たちの人生や社会にとっての芸術の役割、そして地球の未来など、壮大な問いに対峙することでした。さらに世界各地で300以上の国際展があるなか、2022年の愛知ならではの芸術祭とは何かも考えたいと思いました。

愛知県出身で20世紀の美術史に名を刻むコンセプチュアル・アーティスト、河原温が1970年から30年間、「I AM STILL ALIVE」という電報を約900通、友人や知人に送り続けた作品に着想を得て、国際芸術祭「あいち2022」のテーマをSTILL ALIVEとしました。「いまだ生きている」とは、死との距離、生きる希望、蘇る過去や歴史、未来に至る持続可能性などを考えさせる言葉です。

国際芸術祭「あいち2022」では、STILL ALIVEを現代美術展、パフォーミングアーツ公演、ラーニング・プログラムに参加する100名（組）のアーティストが多様に解釈します。愛知の歴史、産業、文化的伝統を掘り下げつつ、世界のさまざまな歴史や文化が一堂に会することで、ひとつの命が世界という空間や宇宙の長大な時間といかに通ぜっているかを感じさせてくれることでしょう。作品の芸術的・身体的な体験と、その背景にあるストーリーを併せてお楽しみ下さい。

織物の街として知られる一宮市では、真清田神社周辺と尾西地区の二つのエリアに19名（組）の作品が展示されています。本町通りのオリナス一宮、一宮市役所から、真清田神社の裏手にある旧一宮市立中央看護専門学校、旧一宮市スケート場などを巡るエリアでは、STILL ALIVEを考えるキーワードとして、祈り、病、ケア、メンタルヘルス、ウェルビーイング、生と死、自然界や動物と人間の関係等が連鎖的に想像される展示になります。尾西地区では愛知県の産業史、一宮市の繊維業の歴史を紐解きつつ、ノコギリ屋根の工場やモダニズム建築にそれぞれの作品が概念的、空間的に応答しています。

国際芸術祭「あいち2022」芸術監督
片岡真実

名古屋を一通り見終わって食事をし、一宮の会場に移動しました。私は自慢では無いのですが、この芸術祭（以前はあいちトリエンナーレと呼ばれていましたが）が非常に好きで、毎回見に行きます。3年に一度の芸術祭は良い刺激を与えてくれるからです。以前からここ、一宮でも開催されるといいなと思っておりましたが、念願叶い開催となりました。会場は一宮の中心部、オリナス一宮、つむぎロード、一宮市役所、旧一宮市立中央看護専門学校、隣接する旧一宮市スケート場、大宮公園、豊島記念資料館、国島株式会社、のこぎり二、墨会館と、よくぞここまでと思わせるくらいに様々な場所で開催されていて、一宮市民としては非常に嬉しい限りです。

個人的に好きな奈良美智氏の作品が、一宮にあるのも嬉しいかぎり。早速そこからスタートです。実際、旧市役所の建物をリノベしたオリナス一宮は、なかなか入る機会がないので、それだけでも楽しみが増します。

早速中に入り鑑賞し始めます。入ってすぐ奥の非常に美しい立体作品をあたかも覗き見るような感じで鑑賞します。中に入っていつもの奈良さんの作品があるなかで、今回重く感じたのは反戦の言葉とNO NUKE。

そうだ。この人は反戦の人だったと。いまウクライナで悲しい戦争が続いている。その為に世界が混沌としてしまっている。きっと辛い気持ちでいるのだろうと。その場で即興で作成したであろう作品にも、LOVE or Nuclear。核戦争に怯える今まさにこの時を実感させられます。一番奥の作品は非常に可愛らしくまた美しい作品でありながら、目から涙を流すその姿に、奈良さんの思いを感じ、少し立ち止まってしまいました。その後、旧看護専門学校の方に移動。毎回思いますが、芸術家が建物から起想する作品から、建築設計を生業にする者として、考えさせられる事が多いのですが、看護学校という生と死を学ぶ学校→実際はそこで実際に生と死はなくとも、その場が生み出す思いというのは、本当に貴重だと思います。1階に展示されている作品も、言葉が主題となっていて、愛知芸術文化センターの作品たちと通じるものを感じました。ここでも**STILL ALIVE→まだ生きている。**を思い起こさせられます。

▲▼奈良美智氏の作品／一宮会場にて

あまりにじっくり見過ぎて、1日では見切る事ができません。一宮会場だけでも充実していて、移動も含めると半日かかります。夕方近くなってしまいましたので、真清田神社の方に戻りつつ、途中の喫茶店、大関屋で休憩。ここ、実はお気に入りの純喫茶なのです。

STILL ALIVE→まだ生きている。私はまだ生きています。私ごとですが、実父は私の年齢で病を背負い、3年ほどで無くなりました。

STILL ALIVE→まだ生きている。と、皆さんも言えるように。

また時間を作って、他会場にも行脚してみます。

宮坂 英司（JIA愛知）
アトリエ創一級建築士事務所